

## 計画集合住宅地での子どもの遊び場と行動パターンに関する研究 —千里ニュータウン・新千里東町を事例として—

正会員 ○小松莉果<sup>\*1</sup> 同 鈴木毅<sup>\*2</sup>  
同 松原茂樹<sup>\*3</sup> 同 奥俊信<sup>\*4</sup>

### 5.建築計画—1.住宅計画

千里ニュータウン 子ども 遊び場 近隣環境 屋外活動

#### 1. 研究の背景と目的

日本で初めての大規模な計画住宅団地として、後の日本のニュータウン開発に影響を与えてきた千里ニュータウン（以下、千里 NT）は、現在建物の老朽化に伴い大規模な団地の建替え工事が進行している。千里の人々の暮らしの舞台であった中低層の階段室型集合住宅が一斉に姿を消していく一方で、容積率の高い高層マンションがその数を増やし、まちの構造は大きく変わりつつある。

このような地域環境の変化は活動拠点が近隣である子ども達の屋外活動に大きな影響を及ぼし、遊び場所や遊びの内容、さらに行動範囲などにも変化が見られると考えられる。そこで本研究では千里 NT の新千里東町を対象とし、子ども達の遊びにおけるまちの使いこなし方の実態把握を行い、近隣環境のあり方を探る事を目的とする。さらに、まちびらきから間もない 1970 年代に東町で育った世代（本研究では「第一子ども世代」と呼ぶ）との世代間比較を行うことで、まちの変化が子ども達の屋外行動にどのように影響を及ぼしているかを明らかにする。

#### 2. 調査の概要

##### 2.1 調査対象地

調査対象地として千里 NT の 12 住区の内、唯一集合住宅のみで構成されている新千里東町（以下、東町）を選んだ。1966 年（昭和 41 年）にまちびらきした東町では 1970 年代後半から団地の一部に増築が施されたが、2005 年から全面的に団地の建替えが始まった。これまでに 10 団地の内 5 団地が建替えが完了し入居を開始し、現在 3 団地が建替え進行中である。団地の建替えは東町の人口構成に大きな影響を与え、高層マンションの増加に伴い外部からの若い世帯の転入が

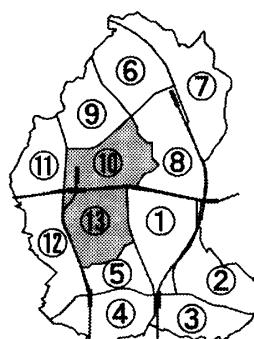
増加し、子供の数は急増している。

#### 2.2 調査方法

本研究では、東町の小学生の生活スケジュールや遊び場所、遊び仲間に関する具体的な情報を得るために、東町の東丘小学校の児童 10 名、3, 4 人ずつ各 40 分程度のグループインタビューを行った。また、5, 6 年生全員にも遊びや生活に関するアンケートを実施し、106 名中 60 名分の有効回答を得た。いずれの調査でも東町の地図に遊び場所などの情報を児童に記入してもらった。以下に質問項目をまとめる。

- ①児童 10 名へのインタビュー
  - ・個人の基本データ：自宅位置・習い事頻度・帰宅時間
  - ・遊び仲間について（人数、属性など）
  - ・一人ひとりの行動パターン（屋外でよくとる行動の軌跡）
  - ・遊び場所と遊び内容
  - ・待ち合わせ場所
  - ・寄り付かない場所とその理由
  - ・その他、遊びや東町に関する発言から重要な部分を抽出する。
  
- ②5, 6 年生へのアンケート
  - ・習い事の頻度（週何日か）
  - ・外遊びの頻度（週何日か）
  - ・よくする遊び（計 3 つ）
  - ・遊び場所（3 カ所）
  - ・待ち合わせ場所（2 カ所まで）
  - ・嫌い、怖い、危ないと思う場所（2 カ所まで）とその理由（下 3 つはそれぞれ地図に印を付けてもらった。）

さらに世代間比較のため、1970 年代に東町で小学校時代を送った世代に対し、当時の子ども遊びに関してインタビューを行った。



①津雲台	⑨新千里北町
②高野台	⑩新千里東町
③佐竹台	⑪新千里西町
④桃山台	⑫新千里南町
⑤竹見台	⑬上新田（NT 除外地）
⑥青山台	
⑦藤白台	※まち開き順
⑧古江台	

図 1. 千里 NT の住区配置

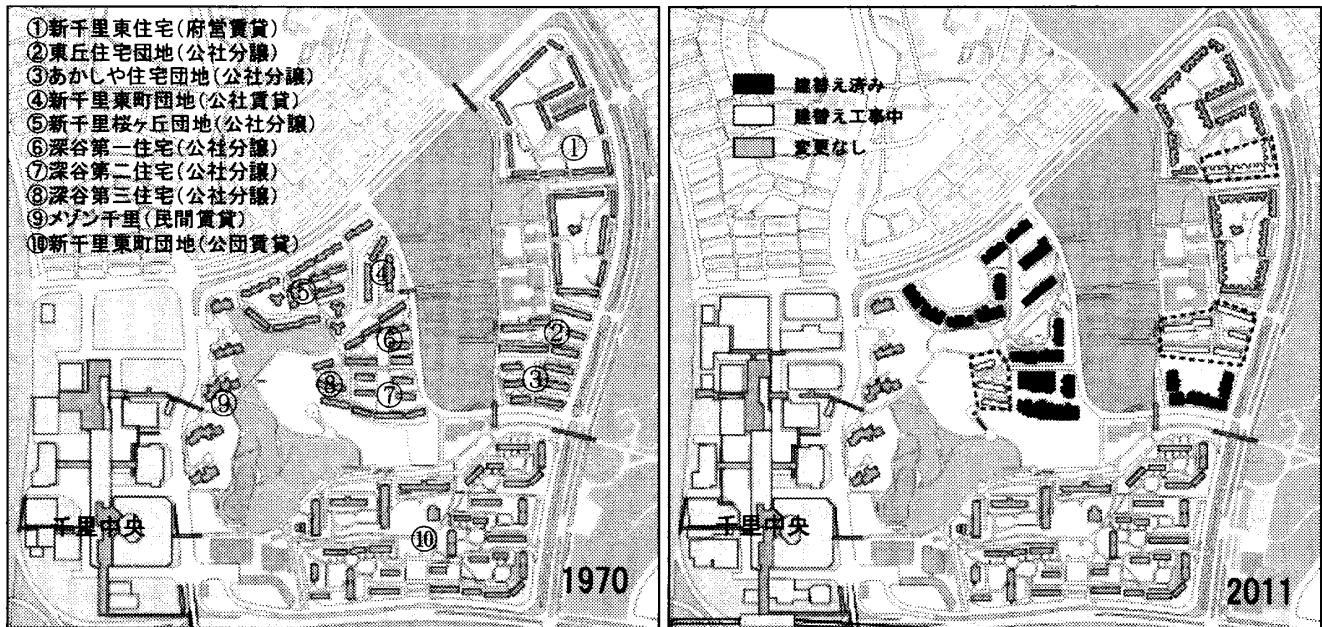


図2. 集合住宅の建替状況

### 3. 東町の現代の子どもの生活と遊びコミュニティ

#### 3.1 生活スケジュール

##### 平日の自由時間

東丘小学校の放課時刻は月・火・金曜日は15:30頃、水・木曜日はクラブ活動や委員会活動等に充てられているため児童によってまちまちである。帰宅時刻(門限)はインタビューを行った児童10名の多くは夏季は18:30頃、冬季は17:30頃であった。つまり放課時刻を15:30、放課後に予定がないとすると、子どもが屋外活動が出来る自由時間は夏季は約3時間、冬季は約2時間である。

##### 習い事・外遊びの頻度

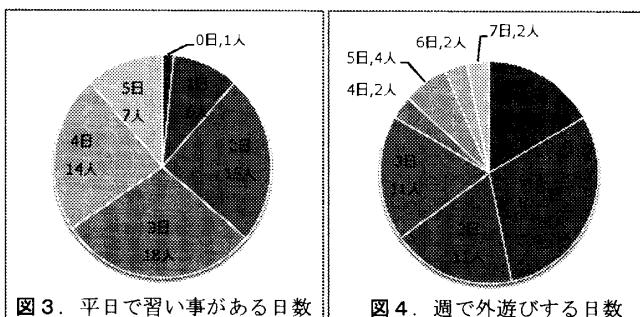


図3. 平日で習い事がある日数

アンケートより、自由時間の短い平日に3日以上習い事があるという児童が過半数を占め、約半数の児童が外遊びをする日数が週1日以下と答えた。また、児童10名へのインタビューより習い事の種類自体も豊富で、子どもそれぞれで放課後のスケジュールも様々であることが分かった。習い事による時間

的制限、子ども同士の都合が合わせにくいという状況が外遊びの頻度の少なさの要因となっていると考えられる。

#### 3.2 遊び仲間

##### 遊びコミュニティの形成場所

インタビューの結果、対象児童10名全員が「遊び仲間=学校の同学年の子」であると答え、近所の子どもも同士で遊ぶという発言はほとんど無かった。現在、多くの子どもが住む高層マンションにおいては近所付き合いがあまり活発でなく、また府営住宅や公団住宅では子どもの数自体がその広さに対して少ないため、そこに住む子ども同士が遊びによってコミュニティを形成することが容易ではなくなっている。その結果、遊び仲間は基本的には学校でしか作れないという事になる。

##### 遊び仲間の人数

遊び仲間の人数については2~4人という答えが多くかった。遊び仲間が学校の友達であるため住む場所が様々で、遊ぶためにはあらかじめ約束を取り付けなければならず、さらにそれぞれで習い事があるとなると人を集めて遊ぶのは難しく、少人数で遊ぶ事が多くなる。

## 4. 東町の現代の子どものまちの使いこなし方

### 4.1 東町での行動パターン

ここで言う「行動パターン」とは、子どもがまちの中でどの道を通り、どこへ行くかを模式的に表したものと指す。インタビューした児童 10 名に地図へ記入してもらった「よくある行動パターン」より以下の特徴が読み取れた。

(1) 基本的にそれぞれの通学路を軸にして行動は広がり、校区内であれば全員が自宅から離れた所まで遊びに出かけている。また、自宅マンションや団地にある広場・公園について記入しなかった児童も多い。これは住むマンションや団地が違う友達と遊ぶために互いに都合の良い場所を選んでいるからであると考えられ、遊び場所の選び方には遊び仲間の住む場所が大きく影響している。

(2) 東町内において「こぼれび通り」以南の記入が 10 人中 7 人と少ない。残り 3 人の内 2 人は南側の公団住宅に住む児童である。こぼれび通り以南と以北を繋ぐのは歩行者用の細い橋か木の生い茂った東町公園しかなく、橋の下には車どおりの多い道が走っているため、唯一その南側に位置する公団住宅はまちの構造的にやや他の住宅とは分離されている。そのため子どもの行き来が少ない。

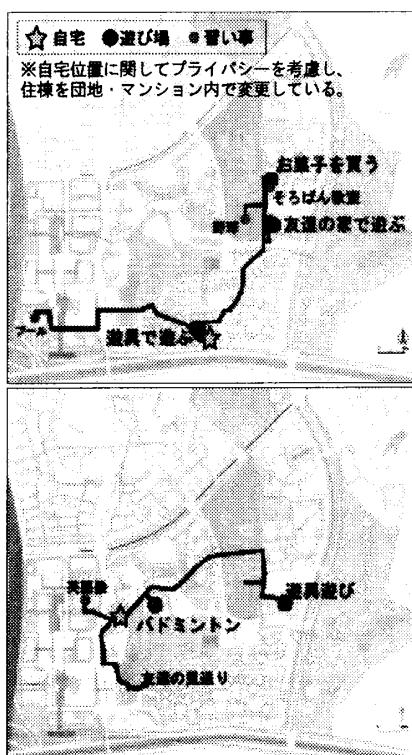


図 5. 行動パターンの例

### 4.2 遊び場所の分布の特徴

遊び場所として公園やグラウンドと並んで人気なのが、管理・整備され安心して遊べるマンション敷地内の広場である。特に大きな 2 つのマンションのオープンスペースには、そのマンションに住む子どもだけでなく、他のマンションや団地の子どもも訪れる。

一方で、府営住宅や公団住宅の敷地内で遊ぶ子どもは少なく、特に団地外から子どもが遊びに来ることがあまりない。府営住宅は建て替え工事が進行中で、公団住宅はまちの構造的に他からやや分離している事、そして両団地に住む子ども自体が少なくなっている事から寄り付きがたいイメージを持つ子どもが増えている。そのため、遊び場所は豊富にあるにもかかわらず、子どもが集まることは少なく、ただ広く閑散とした場所になってしまっている。

また、東町の中心にある東町公園のような自然の多い公園も遊び場所としてあまり好まれない。暗く見通しが悪く、人の往来が少ない静かな場所は、子どもに不気味で不安な印象を与えていた。不審者情報もあり、学校から注意喚起されているという背景もある。

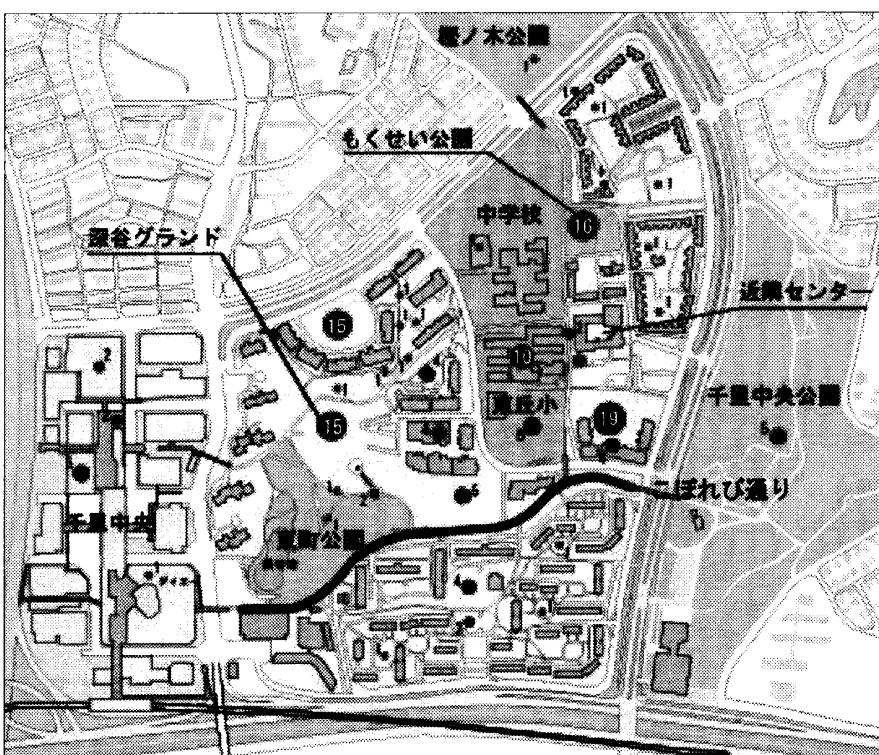


図 6. 遊び場所分布図

## 5. 東町の第一子ども世代との比較

第一子ども世代の代表として、現在東町で子ども達に向けた様々な活動をしている「東丘ダディーズクラブ」のうち、東町で育った方々に当時の子どもの遊び方についてインタビューした。現代の子どもとの違いを以下にまとめた。

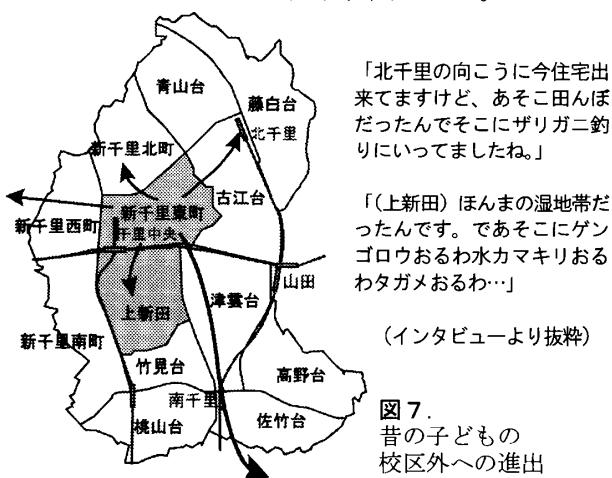
### (1) 近所の遊びコミュニティ

子どもの人口が多かったこの世代は、学校以外にも近所だけで巨大な遊びコミュニティを形成できたため、学年関係なく多様な遊び仲間がいた。住棟の規模が小さかった事や階段室型という近所の繋がりがつくりやすい形態の住居であった事も大きな要因である。遊び仲間が多い分、遊び内容も多様であった。

また、東町の団地の特徴である囲み型住棟配置は集合しやすい空間構成でもあり、遊びの頻度も高かった。これは約束を取り付けないと集まる事も難しい現代の子どもとの大きな違いである。

### (2) 自然環境での遊びと行動範囲

現在の子どもは自然の中での遊びをあまり知らない。また、第一子ども世代がしていた「ザリガニ釣り」のような遊びが出来る環境もほとんど失われている。元々地形、自然を残すように計画された千里NTには池や竹林といった自然環境が豊富にあり、計画的住宅地でありながらそれぞれの土地に特徴があった。そのような遊び環境を求め、校区外へしばしば遠征していたため、この世代は現代の子どもより遙かに遊びにおける行動範囲が広い。



## 場所の名前について

「場所の呼び名」が建替えによって変わっている。深谷団地から建て替わったマンションの名前から「深谷」という地名が無くなっている。あかしや団地から建て替わったマンションも、昔のように「あかしや」と呼ばれなくなった。逆に住宅名のような正式名称が無いような、まちの中にある遊び場や待ち合わせ場所の“あだ名”は今でもいくつか継承されている。

## 6. 課題

建替えられたマンションと残された団地との間で人の往来に大きな差が生じている。特に孤立気味である公団住宅は建替えの予定はない。そこで近隣環境の主役とも言える子ども達の出入りが活発になるよう、団地内の豊富な遊び場の存在をアピールするなどして、団地を地域により開かれた場にしていく必要がある。

また、近隣が遊びコミュニティを形成する場にならないという事が挙げられる。本来近所で繋がりを作りやすかった団地は高層化、あるいは入居者自体が減り、子どもが遊び仲間を作りやすい場は実質学校しかない現状がある。様々な要因で近所付き合いがかつてほど容易ではなくなった今、近隣を遊びコミュニティを作る場にしていくためには、意識的に子ども同士がつながりをつくるサポートをしていく事が今後重要になってくるであろう。

【謝辞】調査へご協力いただきました豊中市立東丘小学校、東丘ダディーズクラブのみなさまに心よりお礼申し上げます。

## 参考文献

浜田洋光:「住宅地計画における遊び空間構成計画に関する基礎的研究—千里ニュータウンにおけるケーススタディを通して—」,日本建築学会近畿支部研究報告集, 317-320, 1980. 6

近藤樹里、山田あすか、松本真澄、上野淳:「多摩ニュータウンにおける子どもの屋外活動に関する研究」,日本建築学会計画系論文集, 第73巻, 第628号, 1251-1258, 2008. 6

谷口新、仙田満、矢田努、水谷孝治:「遊び環境要素から見た計画集合住宅地における子どもの遊び構造」,日本建築学会計画系論文集, 第518号, 89-96, 1999. 4

仙田満:「遊び環境のデザイン」(増補版),鹿島出版会, 2009

\*<sup>1</sup> 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 博士前期課程

\*<sup>2</sup> 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授・工博

\*<sup>3</sup> 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 助教・博士(工学)

\*<sup>4</sup> 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 名誉教授・工博

\*<sup>1</sup> Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University

\*<sup>2</sup> Assoc. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.

\*<sup>3</sup> Assis. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.

\*<sup>4</sup> Emeritus Prof., Osaka University, Dr. Eng.